

日本大学工学部

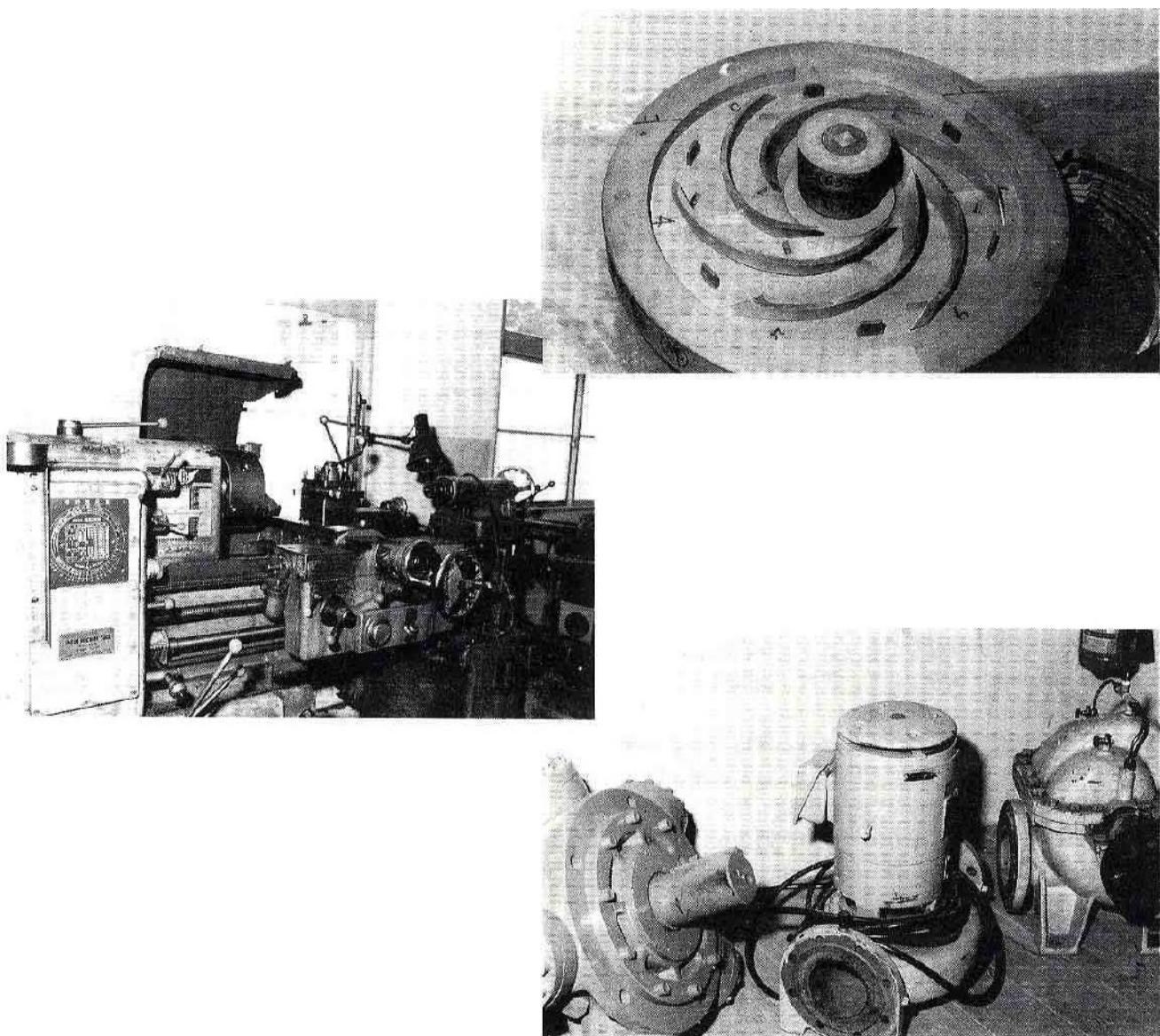
校友会報

第 47 号

昭和 61 年 3 月 1 日

目 次

ごあいさつ	2
第5回母校を訪ねる会	3~4
小林巖先生の思い出	5~7
キャンパスミニメモ	7
同窓会だより	8~9
校友短信	10
ガウディの作品を訪ねて	11
総会通知、事務局だよりなど	12



機械設計製図のための教材

上から、ポンプランナーの木型、工作機械、分解スケッチ用各種機械

(機械工学科)



ごあいさつ

日本大学工学部長

本郷忠敬

校友の皆様には、全国各地はもちろん遠く海外にまで進出して、第一線のあらゆる分野において、目覚ましい活躍をなされており、ご同慶に耐えません。

本年度もまた卒業の時期を迎えました。新しい卒業生は先輩の残された偉業を見習い、先輩の名に恥じないように、母校のために頑張ってください。また先輩の皆様には、これら後輩を導き育てて頂きたく思います。特に私学においては、校友の社会における活躍の成果は、そのまま社会的評価につながり、母校の名誉になります。また母校の発展は校友にとって誇りであり、社会での活躍の大きな底力になります。互に密接に連繋を保って協力していかなければなりません。

昨年は18才人口の減少時期で、志願者の一時的な減少が予想されましたが、これに反して機械・電気工学科を中心に未曾有の激増をみました。これも校友の皆様方の社会におけるすばらしい活躍と、また本学が教学を優先し、量より質、拡張より内部充実に力を注いできた成果が社会に広く認められてきたためだと思います。志願者数は隔年現象とよく言われますが、61年度も順調に増加しました。

工学部も、昭和22年に旧制の専門部工科が駿河台から現在の郡山の地に移設されて、間もなく40年になります。開設当初は、これが大学かと思われるほどの荒廃たる兵舎の跡でした。それが先輩の方々の一途なひたむきの努力により、今日のようなすばらしい学園に成長することができました。その間の足跡を振り返ってみると、予想もできなかった母校の発展ぶりに、感慨無量のものがあります。現在開設40周年(昭和62年)の記念事業として、建設、出版関係など色々と準備が進められています。

本年も卒業生の就職については、お蔭様でほぼ満足する結果を得ました。毎回お願ひしていますが、校友の皆様には、学生の就職について、特にUターンを希望する学生のために、地方都市の求人開拓には、格段のご配慮をお願いいたします。

56年の北桜祭のときから行なわれるようになりました「母校を訪ねる会」には、該当する年度の校友だけでなく、昨年は同期の校友の集まりが郡山で開かれ、多くの方々が出席されました。いずれも参加された校友は異口同音に母校の発展ぶりに感嘆し、驚きと懐しさをかみしめていたようです。今年もお会いできる日を今から楽しみにしています。

校友各位には益々ご健勝で活躍されることを祈念いたします。

(日本大学教授・工博・工学部校友会顧問)



ごあいさつ

日本大学工学部校友会会长

武田仁幸

新社会人として、社会に大きく羽ばたく卒業生諸君、心からお悦び申しあげます。今日この日を待っていたのは諸君ばかりではなく、御両親であり、ご家族ではないかと思います。また、幼年時代から現在まで教え導いてくださいました諸先輩、諸先生に感謝の意を表します。

諸君達を待つ現代社会は順風満帆の時代ではなく、日米における貿易摩擦、ソ連の200海里等と日本に対する風あたりは強く、日本経済の国際的選択が問われる重要な時であります。また昨年は海外においてはメキシコ地震、コロンビア火山の噴火、国内外における航空機の事故等があり、一抹の不安を感じさせられます。昨年から話題になっておりますハレー彗星のせいなのかは知りませんが、76年回帰で地球に最も接近する年が今年であり、太陽との近日点は2月9日に通過するとのことです。この彗星については古来より不吉な星としてきらわれています。中国には西暦867年ハレー彗星の記録があり、また日本書記の中にも彗星のことが記されています。色々な記録をみても天地異変があり、中国の記録は540万キロ至近とあります。今年の至近距離は6,300万キロといわれ、10倍の遠距離であるから天地異変は起らないし、起らないよう祈りたいと思います。

今年の干支は丙寅、五黄土星の年です。『丙』の意味は、昨年一昨年と陽気が一段と盛んになったが、盛んなものは必ず衰える兆しを含む。有頂天になつてはいけないことを表わしています。『寅』はまた演、あるいは縁で、「のびる、つつむ、たすけあうの意」と故安岡正篤氏は記しています。虎のイメージは逞しく、百獸の王として君臨している。体が大きいわりには猫科の動物として機敏、実戦的、行動力は一夜にして30kmを制し、千里行き、千里かえるの例えの通り、実に広範囲です。また、私達が一番大切にしているものを『トラのコ』、という。虎の子は大変に育ちにくい動物と聞いております。良しにしろ悪しきにしろ、色々な諺があります。この様な年に巣立つ諸君、虎の如くに逞しくあれ。

さて、卒業生諸君、君達は今、21世紀に向って新しい国づくりを目指し、日本大学工学部で学んだ知識とこれから実現しようとする夢を追いつづけ、技術国、日本の国づくりの指針者たらんことを希望いたします。何時か学問、社会生活の面で迷いが生じた時は、各地で活躍している先輩達に相談してください。明治の実業家大倉喜八郎の言葉を記して挨拶といたします。

『油断をするな、無駄をするな

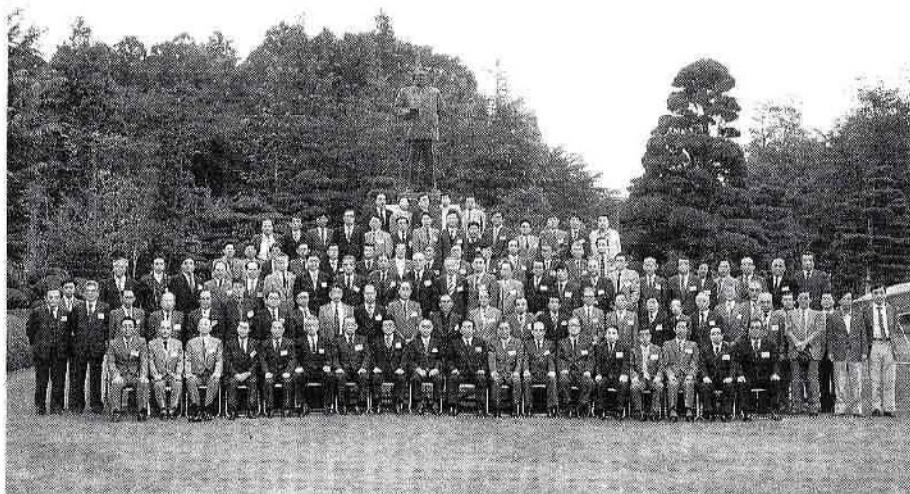
何事も魂をこめて誠心、誠意を以て働く。

(土木工学科3回卒、東和工業株)

第5回「母校を訪ねる会」を開催

前日、郡山市内で多数の同級会

昭和60年10月20日(日)、第5回「母校を訪ねる会」が工学部と校友会の共催で開催された。今回は第13回卒業生(783名)が対象で、そのうち67名の出席者があり大学祭(北桜祭)開催中の多数の市民が集まる賑やかな雰囲気にみちた中で盛大に開催された。当日は小春よりの暖かな日で、北桜祭のなかを校友教職員の案内により、なつかしい学内を見学したのち、正面玄関



『母校を訪ねる会』に出席して

松波清武

肩を組むように連なる安達太良の山々、アカシヤ並木の間をゆったり流れる阿武隈川、20年の歳月は、一刻のうたたねのように感じたほど、郡山の母校はあたかく迎えてくれた。

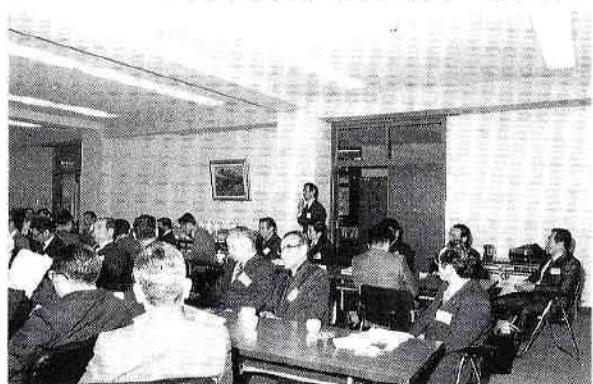
毎年、校友会四国支部に来られる武田会長から郡山の様子を聞いていたので浦島太郎にならず今回訪ねることができました。

前夜の同窓会の二日酔の頭をかかえて、まず柔道部に行き自分の名符を見つけ先輩にたたきつけられた身体の痛みを思い出しつつ、最近強くなった後輩の練習状況を見学させてもらった。会長をやっていた土木研究会では、福島県のダム施工のパネル展で自己の努力によるものが無いと批判させもらった。しかし全体に明るく、のびのび勉学にとらわれることなく楽しくやっている様子は、昔と変わらない知識のテクニックを詰め込む工場大学とならず、人生哲学を考える時間をもたらす母校の良さが存在すると感じました。久しぶりの先生方、武田校友会長らの先輩、同窓会の諸

前で吹奏楽部による歓迎演奏を受け、前庭で記念撮影を行なった後、中講堂会議室において懇談会が開かれた。本郷忠敬工学部長、武田仁幸校友会長の挨拶のあと、出席校友を代表して土木13回卒松波清武氏(株熊谷組勤務)と機械13回卒岡野茂氏(石川島播磨重工株勤務)両氏の挨拶があった。引続き隣の大会議室に席を移して、石田昭二工学部事務局長の乾杯の音頭で懇親会に入った。校友、恩師、学部役職員、校友会役員が昔話や現在の話に花を咲かせ、各科ごとの校友からテーブルスピーチをいただき、終始なごやかなうちに懇親を深めた。最後に全員で校歌、若きエンヂニアを合唱し、工業化学科宇野原教授の万才三唱で幕を閉じた。次回の対象者は第14回卒業生を予定いたしておりますが、それ以外の校友の方の御出席も歓迎しますので、ぜひ前日あたりでも郡山市内などで同級会やサークル会などを開かれて、第6回の「母校を訪ねる会」に出席下さいますよう心からお待ちいたしております。

君(特に夜の郡山を案内してくれた増渕)に感謝の意を表しますと共に、再び訪ねることができるチャンスを切望し、筆を置きます。

(土木13回卒 四国電力㈱シールド工事 熊谷組
日本国土開発、森本組共同企業体所長)



吉原寛陽

先日(10月20日)、20年振りに母校を訪れ、あまりの変貌ぶりに目を疑いました。私が学生時代に大変お世話になった下宿先には、今でも毎年訪れているので郡山の町の発展ぶりはよく知っていましたが、校内に

入ったのは卒業以来のことで、正門の前に立ったときは、年がいもなく興奮いたしました。私達の学生の頃は、まだ木造の校舎が残っており、裏庭では羊や小馬が遊び、そこで友人と一緒に弁当を食べたことを今でも記憶しています。当日は折から北桜祭のときであり、学生達だけでなく近郊の人達も多数見学に来ていたので、大学が町に定着したことを知りました。

また、学生達の日は、皆んな生をしていたのには大変うれしく思い、つい話かけてしましました。持参したカメラで次から次へと撮りまくり、アルバムの数ページを母校のために取ることができました。

この様に有意義な一日を過させていただき、本当にありがとうございました。事務局のみなさんや諸先生方にはいろいろとお世話になり、心から感謝しています。この会が長く続きますよう願っております。

本当にありがとうございました。

(機械13回卒 東洋エレクトロニクス(株))



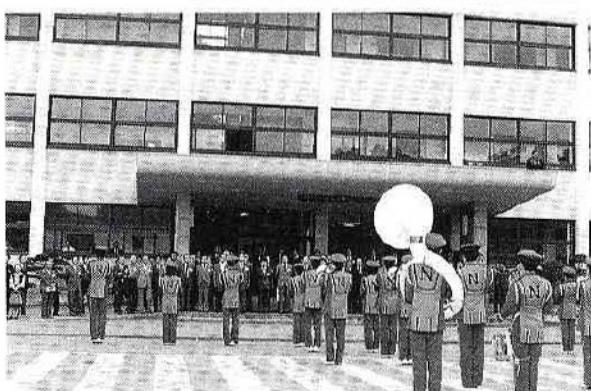
荻原国昭

第13回卒業生を対象とした第5回「母校を訪ねる会」に参加する機会を得ました事を校友会役員各位に対し厚くお礼申し上げます。

電気工学科を卒業して20年になりますが、十数年前に結婚した際に、当時の下宿先を訪ね、その足で母校に立ち寄って以来久し振りで郡山にまいりました。駅前からのバスもあったのですが、阿武隈川のほとりも見たくなり、安積永盛の駅から大学南入口まで歩いてまいりました。遠く大学の大講堂をながめ当時の通学路を歩いたつもりですが、すっかり變っており驚きました。大学管理棟の玄関前ではマーティングバンドの演奏を聴かせていただきましたが、最後に日本大学校歌が力強く吹奏された時は、20年前の在学当時を思い一瞬なつかしさのあまり、大きなものが胸に込み上げてまいりました。青春の大きな1ページに帰れた気がしてこの一事だけでも訪ねた甲斐がありました。懇親会では諸先生方、級友と大いに語り、楽しく、懐かしい、一時を過ごさせて戴き本当に有難く思っております。第6回以降の「訪ねる会」が増々盛会であります様、母

校の発展と共に、遠く北の地よりお祈り申しあげます。

(電気13回卒 国鉄青森電力区区長)



鈴木隆靖

開業されて間もない上野駅から東北新幹線に乗り、車内販売のしめじ弁当を口にしながら那須塙原附近を通り過ぎた頃、車窓から見たみちのくの風景はあまりにも懐しく、20数年前に倍近い時間をかけて何度もなくここを往復した頃を昨日の様に想い出させ、感慨無量であった。その夜、20年ぶりに砂地会（この名称の由来は電気科の留年組、すなわち秀才は英語でジナス、我々はその反対で再修なのでスナジとなる）のメンバーが郡山駅近くの旅館に集結し、盃を交わして翌朝3時迄学生時代の悪業や失態ぶりを語り明かした。二日酔気味で母校を訪ねると昔と比較にならないすばらしいキャンパスがひろがり、そこで多くの恩師と面会できた。学生時代、教官の目を盗んで悪業を重ねてきた自分にとって、恩師はいかにも眩しいものである。しかし、恩師は一同に心から暖かく我々を歓迎してくれ、胸が痛む程ありがたかった。ここで、砂地会以外の参加者が少なかったことが残念だったが、私はここに私学の暖かさを身にしみて感じ、心から感謝している。今後も優秀なエンジニアを送り出していくこともさらなるながら、本学部が心豊かな逞しい若人を育成してくれることを期待し、自分も卒業生の一人として更に自覚を高め、微力ながら母校の発展に寄与したい。

(電気13回卒、鈴木魚探株代表取締役社長)





小林 嶽先生の思い出

群馬大学工学部助教授 上崎省吾

§1 まえがき

私の約20年の研究生活を通じて今なお生きているのは小林先生からの学問の教えであり、それがいま自信の源になっている。筆者4年生のとき菊池秀之先生の指導で水中通信の卒研を行ない、その後、東北大大学院で虫明先生のもとで電波伝播の研究を行なった。その後、助手を4年間務め、昭和42年群馬大工学部に移り、現在に至っている。

§2 日大時代

筆者は昭和32年地元の日大工学部(当時第二工学部)に入学した。広川先生(物理)の講義中の雑談として小林先生の経歴をきき、非常に興味を覚えた。小林先生は神田の生れで、一高、東大を経て3年間ドイツへ留学、32才で九州帝大教授、後、東北帝大教授理学部長を15年間も務めた。日本では最高記録である。

その様な訳で早くから小林先生の数学の講義を受けられる事を楽しみにしていた。しかしカリキュラムの関係上、私の在学中先生から直接関数論、微分方程式(西本先生担当)を受けることはできなかった。小林先生からはドイツ語1、4(科学ドイツ語で大学院受験で役立った)であった。

小林先生は偉い先生と思い、非常に近づきにくかった。2年生のとき私は微分方程式の勉強に専念した。私は二本松一永盛間を汽車通をしていた。

ある日、永盛駅で列車に乗ると、座席の向うに小林先生のお姿が見えた。すぐ行って質問しようと思った。こんな問題を聞いて笑われるのではないかと思い迷ったが、思い切って質問をした。「先生次の微分方程式

$$\frac{d^2y}{dx^2} + k^2 y = x \sin x \quad (1)$$

どうして解くのですか?」

先生は少し考えて「これは高級だ。」この表現が面白い。高等な問題であると云う意味である。その時、我々の周囲には数人の客がいて、「何んだべ」といった様子で興味深げに我々を見守っていた。その様子等から何事か判らんが偉い先生と思ったらしい。それをきっかけとして先生に質問する自信がついた。

当時小林先生は図書館長をしており、いつも館長室におられた。それから時々質問に出かけた。その目的は学問のためと自己を知ってもらう為である。ある日私はmaxwellの方程式

$$\frac{\partial^2 E_y}{\partial x^2} = \mu \epsilon \frac{\partial^2 E_y}{\partial t^2} \quad (2)$$

の質問をした。私は上式の意味を理解していなかった

が、先生はこの式は時間 t と空間の座標 x と共に進行する波を表わしているとお答えになった。その事が私にとって非常に興味を引いた。また電波は空間中を流れる電流であることも教えられた。

大学院受験は2年生から考えていたが、東北大大学院(電気及び通信専攻)に合格した。それで研究室を決めねばならなかった。この事を小林先生に相談した。電波伝播を研究するなら野邑先生(小林先生の弟子)を推せんされた。しかし先生は1年後に停年という事で、アンテナで有名な虫明教授の指導をうけることにした。虫明研は八木、宇田(テレビアンテナの発明者)の研究室で伝統があった。しかしアンテナの研究が中心で電波伝播の研究はされていない。

§3 東北大時代

一研究テーマ決定

虫明研に入つてから虫明著アンテナ・伝播コロナ社とJeans のElectricity and Magnetismの勉強をした。

5月になって安達助手(現東北大教授)が私に論文をくれた。それは海岸線における電波伝播(coastal propagation in the sea)である。それは私が虫明研に入る条件として電波伝播の研究をしたいと要求した為であった。当然虫明研の中心はアンテナであり、安達助手はアメリカから帰国すると間もなく円筒による電磁波の散乱をやっていた。したがって電波伝播の研究を始めたのは私が最初であった。しかし上述の論文のレベルは高いと言う事で断念した。その後安達さんが次の論文を手渡した。不均質媒質中の電波伝播(wave propagation in inhomogeneous medium) 論文名J. A. P. であった。この論文を読んで研究を続けてはどうかと言われた。それらの関連論文と共にそれらを読み、暗中模索しながら進み、次の微分方程式に突き当った。

$$\frac{d^2 Ex}{du^2} + UEx = 0 \quad (3)$$

私は学部時代微分方程式、演習を含めて数冊の勉強をしたので微分方程式に関して非常に自信があった。しかし(3)は思う様に解けなかった。そこで(3)のべき級数の解法を試みる一方、小林先生に診察して頂いた。すると先生は一目見るなり、この解はBessel関数だと言られた。先生は(3)を計算用紙にすらすらと何も見ずに解かれ、結局^{*} オーダのBessel関数($J_{\ell}(u)$)にな

*普通Bessel関数は $J_0(x), J_1(x), \dots$ で、オーダは整数である。

ることが判った。考オーダのBessel 関数を起点として私の研究生活が始まった。

一修士の研究—

私が虫明研に入るとすぐに小林先生は虫明教授室をたずね、私の事を宣しくお願ひした。虫明先生は学生時代小林先生から力学の講義を受けておられ、よく知つておられた。その折小林先生は次の様にお願いしたそうである。「上崎君は気にしないから、他人より厳しく指導してくれる様に」と頼んだ。この言葉は今後12年間虫明先生と共同研究を行なう上で非常に励みになり、色々の難局に立たされた時その言葉を思い出した。

考オーダのBessel 関数から順調に研究が進み、その経過は詳細に亘って小林先生(自宅は仙台)に報告、色々と指導をうけた。不均質媒質中の反射係数を導くことは安達教授の援助もありやっとの思いで成功した。その計算の途中の経過は虫明先生には1月2回、小林先生には1週1回で報告した。

修士1年10月頃研究室の雑誌会で私の研究結果を発表した。その折、ある先輩が私の研究結果はすでにBrokovskih 著Wave propagation in Layered Media 1960年に発表されている旨を指摘した。この事は私にとって大きなショックであった。当然その事を小林先生に報告した。すると「私の研究は間違った方向でなく、その様な研究仲間がいたと自信を持つべきである」と私を激励された。

しかしその後、虫明先生の助言で、その問題を拡張した計算を行ない、その結果を学会で発表した。修士2年の秋であった。

一小林先生の研究発表—

1962年4月頃から小林先生の研究が始まった。その時76才であった。先生が東北大を退官されたのは昭和22年である。その後数年間先生宅は米軍に接収され、食糧難にみまわれ研究が出来なかつた。小林先生が研究をしようと思ったその動機は「上崎君のお陰だよ」と言われた。私から研究の話をきき、自分もしてみようと思ったのである。小林先生の研究結果を応理の野邑先生、高久先生^{*}の前で発表し、それを独文で東北大理科報告に発表している。その後も先生は研究を続行された。またその研究結果の発表場所として高久先生は東北大通研主催の伝送工研で発表することを提案した。その発表に際して、その発表原稿の準備等は虫明研のメンバー（その一人現在静大木郷広平教授はそのプリントを見たのが動機になり、博士論文終了後小林ボテンシャルを電磁波の問題に応用研究し、多数の論文を発表している）が担当した。先生の研究内容は静電ボテンシャルの問題で、約2時間に亘っての発

*高久先生は野邑教授の退官後、急に後任として福大からこられた。高久先生は野邑先生の傍系の弟子であるが、研究は同じで小林先生からは孫弟子にあたる。

表はその聴衆を魅了した。私の受けた感じは日大の数学の講義の様なものであった。

先生の研究にはWeber-Schafheitlin の積分が出てくるが、これがFourier 積分の入口であると言われたり、Taylor 展開できる関数は真面目な関数など、そのたとえが面白く、難かしい話も肩をこることなしに聞くことができた。その発表が終ると座長の内田英成教授(後、東北工大学長)が立って論評を加えられた。それによると小林先生の講義(発表)は神の世界にも通じるものがあったという。発表終了後、私が研究室に戻るとその会場で聞いていた松村君(宇太助教授)、伊藤君(山梨大教授)は私に次の様に言った。「我々は日大に入ればよかった」と。なぜかと聞くと、小林先生の様な先生のもとで学べるからだと言う。その様な意味で小林先生の講義を受けた人々は幸せである。今後、小林先生の様な先生は得られないことを残念に思う。

小林先生の研究結果は東北大理科報告(独文)、Ann. der physikにある。先生の研究は30年間その価値が認められなかったが、最近I.N. Sneddon 著Mixed Boundary problems in Potential Theory 中に引用され、「小林ボテンシャル」として知られる様になった。

一先生の人間性—

先生の人柄は言うまでもなく学者タイプである。とはいってもそれはどこそ眞面目ではない。私は先生の言葉使いにはいつも感心していた。例えば先生は私達の会話の中で、私に対して野邑君とは言わずに野邑先生とおっしゃつた。しかし小林先生が野邑先生と対面すると野邑君であった。或る時小林先生が虫明研の私を訪ねて来た事がある。その時研究室の秘書に上崎さん(君でない)はいますかと言っておられた。また先生は身分の低い人例えば小使いさんには言葉使いがていねいである。しかし身分の高い人例えば学部長などに対してもまるで態度が変わり、高飛車である。また散歩中、見知らぬ人が小林先生に道をたずねた事がある。その時もていねいに道順を教えてあげた。

私が博士課程に行くか、助手になるかで迷った時機(岐路に立った)がある。その事を先生に相談した。「物事ということは自己(分)が得になる(有利になる、プラスになる)様に解釈することである。」

この言葉は私の家庭生活において現在も生きている。小林先生は宮城県三曲協会(琴、三味線、尺八)の会長であった。先生に流儀をたずねると、流儀はなく自己流であるとおっしゃつた。自分で考えた流儀であるという意味である。この様に研究面ばかりでなく趣味においても独創的であった。中山栄女史によると小林先生の琴の音色は他の人にくらべて抜群であると評しておられた。

§ 4 筆者の今までと現在

一筆者の今までの研究—

不均質媒質(電離層、大気など)中における平面波の

伝播の理論と実験、不均質媒質(光ファイバーの様なもの)、不均質媒質中の電磁パルス、ビーム波の伝播誘導体界面の光ビーム波の側方変位、非線形媒質中の光ビーム波、媒質が突然時間的に変化したときの電磁波、2円柱による電磁波の散乱、円柱完全導体、誘電体不均質によるビーム波の散乱

一現在の研究一

角柱導体による電磁波の散乱、異方性媒質に対する光ビームの反射、トンネル内の電波伝播、通信線路に対する外部雑音の影響(コンピュータの誤動作)、電磁シールド、不均質媒質を用いた反射波軽減法

一略歴一

昭和36年、日大二工電気卒、菊池秀之先生のもとで水

中通信の研究

昭和38年、東北大大学院修士課程修了、虫明先生のもとで不均質媒質中の電波伝播の研究

昭和38年から昭和42年、東北大助手、上記の研究の続行

昭和42年、群馬大工学部講師、引き続き上記の研究を続ける

昭和49年、同大学助教授、現在に至る

昭和50年から51年の1年間、文部省在外研究員として米国コロラド大J.R.Walt のもとに留学、空電中における過渡電磁波の放射の研究を行なう。

(電気工学科第9回卒)

CAMPUS

mini MEMO

◇内田先生が定年退職

内田一郎(化) 昭和31年4月1日～60年11月26日

長い間のご苦労に対して、会員一同、感謝いたしました

◇第28回学術研究報告会開催

この第28回日本大学工学部学術研究報告会は工学部の主催、工学部校友会の協賛で、60年12月7日に工学部で行なわれた。発表件数は168件であった。

工学部の教員や大学院生、研究生による発表が主であったが、当校友会会員で、現在、工学部とは関係のない職場の人による発表は、次の6件であった。

「小口径推進による推力に関する一考察」

川崎市役所 鈴木 熙(土15回卒)

「硝化菌に関する研究」

浜松市役所 原田良誠(機15回卒)

「バルキング汚泥の活性度について」

理工学部大学院 大内浩之(電32回卒)

「部分重複波のうちあげ越波流量について」

生産工学部 遠藤茂勝(土14回卒)

「コンクリートに生ずる初期欠陥の定量的評価法に関する研究——一面養生した性状——」

金沢工業大学 浦 審親(建18回卒)

「郡山市内河川の水生生物による調査」

郡山市公害対策センター 安江和代(旧姓佐藤)

(化22回卒)

この学術研究報告会は、毎年12月上旬に行なわれており、一般校友の参加も可能であり、それらの詳しいことは、校友会事務局に問い合わせて下さい。

◇課外活動各部の活躍(60年6月～61年1月)

○水泳部

東北地区大学総合体育大会(%)

100Mバタフライ 2位 安藤和彦

100M・200M平泳 3位 藤田和彦

○軟式庭球部

日本大学体育大会(%) 優勝(団体)

○バレー部

第57回東北バレー部大学南奥羽リーグ戦(%)

II部 優勝

○洋弓部

昭和60年度秋季南奥羽選手権大会(%)

男子団体 3位

女子個人 優勝 安藤まゆみ 2位 浜津由美子

○自動車部

東北学生自動車連盟

ラリー戦(%) 優勝、フィギア新入戦(%) 優勝、

整備大会(%) 優勝

年間総合優勝 (この項、学生課調べ)

◇15回めになったヨーロッパ研修旅行

昭和47年に、当時の野引勇学部長のもとで、学生を対象とした「欧州研修旅行」が始まられ、今年でそれが15回めとなった。

当時の学部長の挨拶に「そもそもこの研修旅行は、めざましい発展を遂げ、ますます複雑化していく世界の工学技術の一端に触れる同時に、目を世界に開かせることを目的として企画したものである」とあり、それはそのまま毎年受けつがれている。

これらの成果は、毎年発行される「旅行記」にまとめられており、第1回に参加した吉口一巳君(機21回卒)は、そこで「今回のヨーロッパ研修旅行は非常に僕達のためになり、これから先も続くようにしてもらいたいと思います」と言っている。(た)

同窓会だより

専門部土木1・2回生合同同窓会

堀江光郎

去る60年10月19日(土)磐梯熱海温泉守田屋旅館に於いて専門部1・2回の同窓会を催しました。今回は初めての試みとして、開校当時勉学と学園整備交渉等と共に通学していた1・2回生の合同会を東京在住第1回の太田実氏を世話人代表として、大河原基典氏・大竹清四郎氏・桜田寛活氏・車田博信氏・山野茂氏(2回)・地元より佐久間良一氏・堀江(2回)らが中心となつて呼びかけたところ、遠く札幌や新潟よりの参加者を含め39名による会合が盛大に行なわれました。また翌20日(日)の北桜祭見学と母校を訪ねる会に参加するスケジュールもあって懇親会には校友会長の武田仁幸氏と校友会東京支部長の古村和夫氏も加わり30数年ぶりに出会った方達も多く、当時のなつかしい思い出を語り合い、盛大になごやかのうちに終りました。

20日の北桜祭には初めての参加者も多く、杉内先生(1回)の案内で学内を見学しましたが、校庭の一部にあるアカシヤの並木に昔の面影がある位で、施設・設備の充実した学園に驚きました。また資料館には30数年前の通学・学園実習風景の資料が展示されて居り、当時が思い出され感無量で見入って居りました。11時からの管理棟玄関前で行なわれたドリル見学会では、揃いのきれいな制服姿による吹奏楽団の演奏する校歌を始め、数々の動作演奏に感激しました。母校を訪ねる会では今回は13回生を中心に行なわれたのですが我々1・2回生と7回生も加わって行なわれました。会では本郷学部長の挨拶のあと各担当の先生より学園の近況・現況等のお話、遠来の卒業生の挨拶のあと懇談パーティに入りましたが初めての参加者も多くそれぞれ先生方を囲み、昔を・今を語り合い皆さんでなごやかな1日を過しました。

(専士2回卒、菱和コンクリート工業株)

土木13回卒「アカシア会」について

外山三喜

土木13回卒の同級会を「アカシア会」と称し、毎年、東京で小規模ではあるが、親しい仲間が集まって開いていました。

今回、卒業20年を迎えた私達を対象に工学部及び校友会との共催で「母校を訪ねる会」が北桜祭の一環として開催されることを知りました。この機会に郡山の地で「アカシア会」を開き、母校の発展ぶりを目の当たりに見ようと計画しました。

60年10月19日(土)、郡山ビューホテルに、北は北海道から南は九州まで総勢32名が集まり、恩師新田亮先生を囲んで楽しい一夜を過ごしました。

3年後には、今回の出席者の倍以上の参加を得て、「アカシア会」を盛大に開催することを約束して閉会しました。

(東京都下水道局)



吉沢周蔵先生古稀のお祝とゴルフコンペ

増山敬芝

この度、恩師吉沢周蔵先生が今年満70歳を迎えられましたが、我々機械工学科第6回卒業生で簡単なお祝をと一部の仲間から声がかかり、吉沢先生にお話ししたところ、皆さんに元気なところを見て欲しいと言うことで、ゴルフをと希望され、仲間に計ったところ、暫くゴルフコンペも中断されているのでと言うことで、60年11月13日霞ヶ浦国際ゴルフコースにて、3組で行なわれました。

当日は小春日和の絶好の日となり、1ラウンドの予定が、昼食時に1.5ラウンドの声があがり夕方まで楽しい1日を過し、簡単なパーティを催しました。

本日出席の10名と、残念ながら仕事の都合で出席できなかった有志の人達より、心ばかりの記念品を吉沢先



先に贈り、今後増え健康に留意され、後輩の指導をよろしくお願い申し上げました。

吉沢先生から「諸君達も50歳と言う年齢に達したのだから、健康に充分注意され仕事を全うするよう、そして健康であれば楽しいゴルフも70歳以上になっても出来るよ」と身をもってご教授いただきました。吉沢先生の末永く健康で活躍されることをお祈り申し上げます。

会食時、小池幹事より出席できなかった人達の近況報告があり、往時の元気な姿が想い出されました。なお、その際伊藤君より土岐沢敏郎君が本年5月に逝去された報告があり、全員驚き御冥福をお祈りし、改めて健康管理の大切なことを再認識しあい、次回の再会を楽しみに散会いたしました。

(機械工学科6回卒、株サトーラシ専務取締役)

京浜ソアリングクラブのこと

坂井正一郎

京浜ソアリングクラブは、日大第二工学部(現工学部)の滑空研究会のOBが中心になって設立したグライダークラブです。

早いもので設立後すでに15年になり、その間に幾つかの変遷を経て、現在では広く一般から会員を募集しており、4機のグライダー、60名の会員がおりますが、現在でも、運営委員長と2名の副委員長は、郡山OBです。

お蔭様で日本のグライダー界の中でも中堅クラブと見なされており、昨年(59年)4月の日本選手権、今年(60年)5月のクラブクラス選手権の主管クラブに指名され、競技会を主催しました。また、今年の日本選手権には我がクラブからは、原さん(機22回卒、日立精機勤務)がスタンダードクラスに選手として参加し5位の成績を残しました。



現在、クラブの運営委員長は秋山さん(機38年入)で、一昨年自から会社を設立して忙しいなか、昨年の日中親善グライダー競技会に参加してきました。副委

員長で機材担当の曾我部さん(機11回卒、日本飛行機勤務)は、5年間ほどスイス・ピラタス社設計の金属製グライダーB-4の日本国内ライセンス生産の現場課長として苦労しておりましたが、現在一段落しました。このB-4機の国内販売第1号機は、我々のクラブに納入され活躍しております。もう1人の副委員長の私(坂井、機10回卒、日本航空勤務)は、クラブ内では運航部門を担当しており、この15年間大した事故の無い事を誇りにしております。また、一昨年米国ニューメキシコ州で行われた第18回世界選手権の日本チームの団長に指名されて行って参りました。世界のレベルは高く、まだまだ勉強する事ばかりです。

我々のクラブは、千葉県の関宿(せきやど)滑空場をベースとして毎日曜日に活動しております。(首都圏からは最も近い滑空場です。)

滑空研究会のOBに限らず、たまに空でも飛んでみようか、という方どうぞ遊びにお出ください。

(機械工学科10回卒、日本航空株成田運航乗員部機長)

建築第7回卒「参志会」同級会

遠藤 弘

第3回「参志会」の同級会を2年ぶり、「母校を訪ねる会」の日程に合わせ日大研修会館にて懇親を深めました。

10月19日に日大本館前に集合してもらい、同級生の小栗助教授の案内で、キャンパス内の各施設をみてまわりました。校内での在校生の活気あふれる姿をみて感激しました。資料館では、30年前の木造校舎の写真をみながら在学中に第1号の鉄筋コンクリート校舎改築がなされ、工事中に1トン爆弾が掘り出されびっくりしたことを思い出されます。

19日の夜は、研修会館で恩師の師橋先生をかこみ、夜おそくまで懇談しました。

20日の「母校を訪ねる会」には、残念ながら全員出席できず私が代表して出席しました。

次回は4年後、東京で再会を約して散会しました。

(福島県郡山建設事務所)



校 友 短 信

土木工学科

◆榎田寛治（専1回卒、高田機工㈱東京支店技術部長）
母校を訪ねる会に出席し、35年ぶりに母校を参観して非常に感激いたしました。

(60. 10. 24受)

◆正立克英（13回卒、横浜市公共下水道設計担当係長）
60年春、河川関係から転じてきました。都心部の幹線下水道の設計等を担当しております。ちなみに今年度の公共下水道関係の予算は、1,300億ぐらいありますので、かなり多忙です。

(60. 9. 27受)

◆貝原孝雄（26回卒）

国際協力事業団（JICA）の海外長期研修制度により、2年間の予定で、アメリカ（テネシー州）のパンダービルト大学の大学院へ留学することになり、1985年12月末、家族とともに渡米します。大学では、運輸関係インフラストラクチャのプロジェクトに係る経済評価をテーマとして研究する予定ですが、アメリカ人の考え方、生き方等多くを学んできたいと思います。

(60. 12. 24受)

建築学科

◆桃原 隆（6回卒、宣野湾市土地開発公社理事長）
沖縄県の校友同志も年を数えるたびに増加の一途をたどり、今は50数人となっております。

(60. 11. 1受)

機械工学科

◆川崎忠良（13回卒、ヂーゼル機器販売株福岡営業所）
卒業後はじめて、60年8月16、17日に、昔の下宿仲間（同級生）6人のうち、5人が鶴見町の下宿に集まり、岳温泉で旧交を温めました。メンバーは建築の姉崎、山田、天地、電気の小野寺とそして私です。

(60. 9. 20受)

◆野沢 旭（17回卒、BIKE SHOP MOTORRAD）
ヤマハ発機㈱を退社し、かねてからの念願であったオートバイ販売店として、独立開業致します。バイクショップ モトラードです。オープンは60年12月初旬の予定です。

(60. 11. 25受)

◆佐々木和哉（31回卒、石川島タンク建設㈱）
日本で最初のLPG備蓄プラントの建設が大分県でスタートしました。そのうち、43000Tタンク2本を我社で建設します。私はその設計を担当しています。

(60. 11. 11受)

（校友会の事務局へのお便りや、連絡などから
無断で掲載いたしました。ご了承下さい。）

電気工学科

◆松本義和（1回卒、第一生命相職域業務部福島駐在調査役）

陸上自衛隊の定年を迎え、郡山に帰ってきました。
(60. 10. 8受)

◆日景範久（13回卒、日本電気移動無線サービス㈱）
60年春に入社しました。現在、ケーブルのプロジェクトで、再々、東京とケーブルを往復しております。
(60. 9. 21受)

◆富田恒夫（28回卒、秩父市立高篠中学校）

教職生活もはや6年、教え子も成人を迎えて、現代の荒波にもまれながらも築立っていることだと思います。今後も現代社会に通用する青年の育成に少しでも貢献できればと存じます。

(60. 10. 8受)

◆比企 進（32回卒、㈱東芝 那須工場）

超音波技術部で超音波診断装置のブロック開発をしています。センサーの開発です。ようやく、自分の製品が世に出るようになります。先日のオーストラリアの学会でも好評でした。

(60. 10. 5受)

工業化学科

◆古田生春（13回卒、日本油脂㈱）

60年8月に塗料研究所から本社塗料企画室に転勤となりました。新らしい仕事に懸念苦悶している毎日です。
(60. 10. 3受)

◆堀 博信（13回卒、オーベックス㈱）

東京帽子㈱は60年4月から社名をオーベックス㈱に変更しました。渡辺栄一翁創業以来第100期を迎えて新たな一步を確かなものとしつつあります。

(60. 9. 30受)

噂のページ

◆斎藤 学君（専・電気1回卒）

学校法人福島成蹊学園評議員理事

昭和60年9月21日に、福島市体育功労賞を受賞しました。昭和26年以来35年間、全国規模のソフトボール大会の講師に尽力。永年にわたり地域のソフトボールの普及、技術向上に貢献されました。（事務局）

ガウディの作品を訪ねて —建築と美術の協同についての視察—

日本大学東北高校 教諭 古 橋 栄 吉

西ベルリンからスイスの首都ベルンまでの旅は、アウトバーンをバスで南下し、メルヘン街道、ライン河、黒い森など美しい自然と、古い街並みに魅了されての旅だった。これら風光明媚な諸都市を巡っての後、ガウディの建築作品を見学するため、旅はバルセロナに続いた。

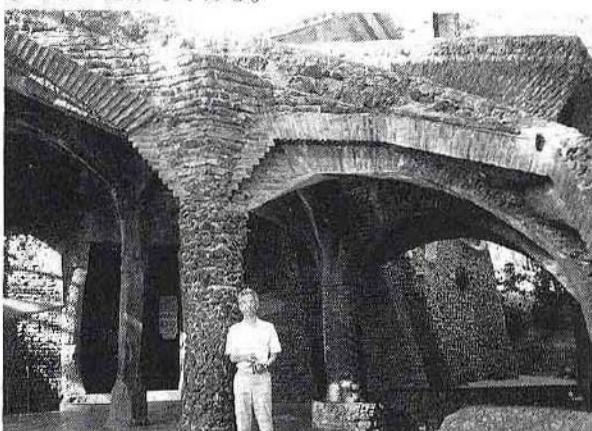
ジュネーブからの機上、窓からの俯瞰はバルセロナに近づくにつれてバジターブルーから赤茶色の大地に変わってきた。強い陽射しがその乾いた丘陵を照りつけ、私はその時、ガウディの建築を連想していた。

何年か前に遡るが、ガウディの建築を知った時は、あの鐘乳石のような奇異な形態に戸惑い、驚かされたものだった。しかし、それ以上は理解しないまま今春、テレビや勅使河原宏の映画「アントニ・ガウディ」を観て、ガウディおよびその作品について多くを知った。スペインのバルセロナという土壤をバックに、幻想的ビジョンと力学的な完全を見事に一致させてのデザインに、私は惹かれはじめた。それを追うようにしてバルセロナ行きの機会を得たというわけである。

バルセロナ空港からバスで街の中心部にあるホテルに着いたのは、まだ日も高い午後の4時頃であった。バルセロナでの滞在日程は正味1日であり、私はガウディの建築を一つでも多く見学したかったので、この地の遅い夕食を前に作品めぐりを始めた。

まず、ホテルより20キロ離れた郊外に建つコロニア・グエル教会堂（1898～1916）にタクシーを走らせた。

松林の中で聖堂を見つけた時、私は予想をこえた建物の質感に満足した。木漏れ日を受けた不揃いの石や土と同化した色調のレンガの荒積みは、石造建築とは思えないやわらかさで、周囲の空間にしつつ、おきまっていたからである。



〔写真 コロニア・グエル教会堂〕

たまたま、結婚式が済んだところで、入口付近には多くの人が集まっていた。聖堂の扉は札押や結婚式の時だけ開き、丁度、運よく聖堂内に入ることができた。

室内はステンドグラスの色あかりだけで薄暗い。なたで削ったような石の柱が傾いて立っていた。その頂部からはボーアルト・リブが放射状に彫り深く天井いっぱいに広がっている。ゴシック構造に比べ、さらに大胆でくだけた構造形態と、装飾を織りこんだ見事な空間をそこにみた。

未完成のままの地下聖堂とはいえ、ガウディの意図する自然と造形の関係を建物の内外から見学できたような気がした。

ふたたびタクシーをとばし、ガウディの設計によるグエル公園（1900～1914）に着いたのは陽射しも長い午後の6時だった。

入口にはガウディの設計と、一目で分かる門番小屋や巨大トカゲなどのオブジェがあり、それらはお伽の国を思わせる楽しい雰囲気のものであった。

公園全体は傾斜地形を生かし、高台広場までの遊歩道は曲り上っている。広場からの視界は遠く街が見渡せるほどに広がっている。この広場を縁どるかのように、鮮やかな陶片タイルを嵌め込んだテラス・ベンチが波形にデザインされていた。近くで見る陶片タイルは、どこの家庭にもありそうな食器類の欠けらを使用したもので、親しみを覚えた。

また高台広場を一周する遊歩道の擁壁や回廊柱は、公園の造成中に堀り出されたと思われる岩石の荒積み、あるいは椰子の幹をかたどってのデザインで、周囲の環境に同化されていた。

土塊を生かしたガウディの徒ならぬ才を知ると同時に、デザインへの執念と心くばりに私は頭が下った。

そのほか、西ベルリンにおいて、コンピュジェの設計によるユニテ・アビタシオン（都市単位としての集合住宅）および、ミース・ファン・デル・ローエの設計による国立美術館など、巨匠達の作品を見学し、デザインコンセプトから建築空間、質感、ディテールにいたるまで自分の目で確認できたことは知識にも勝る収穫であった。

以上、60年夏、日本大学より昭和60年度海外派遣研究员として、7月13日より22日間、ヨーロッパ諸国への出張の機会を与えられ、表題の研究テーマについて研修してきた。ここでは特にスペイン異色の建築家アントニオ・ガウディの作品から、その所感を述べた次第である。

（本会評議員 建築学科8回卒）

日本大学工学部校友会

会員各位

昭和61年3月1日

日本大学工学部校友会

会長 武田仁幸

昭和61年度通常総会通知

校友の皆々様には、各職域において益々御健斗のこととお慶び申し上げます。

さて本会規則第28条により、日本大学工学部校友会昭和61年度通常総会を下記により開催いたしますので、先輩、後輩お誘いあわせの上多数御出席くださるよう御案内申し上げます。

記

1. 日時 昭和61年4月19日(土) 午後2時

2. 場所 日本大学郡山研修会館(郡山市愛宕町2-22) TEL.(0249) 23-4193

3. 議題 昭和60年度会務及び決算報告、昭和61年度事業計画及び予算(案)審議、その他

4. その他

(1) 諸般の事情により、本号に掲載の上記案内によって総会通知といたしますのでご了承ねがいます。

(2) 総会終了後、引き続き同所において懇親会を予定しております。

(3) 研修会館宿泊希望の方は5日前までに母校庶務課(TEL.0249-44-1300代)に申込んでください。

[事務局だより]

◇日本大学校友会工科系連絡会開催

日本大学の工科系3学部(理工、生産工、工学部)を卒業した校友は、社会的には日本大学工系の卒業生として、学部にこだわらず、高い評価を得ている。

そこで、工系各学部の校友会では校友の益々の発展を期して昭和58年11月「日本大学校友会工科系連絡会」を発足させ、各学部校友会開設順の持ち回りで毎年開催している。本年度は生産工が担当で昭和60年9月2日生産工学部キャンパスで開催され、主として大学創立100周年記念事業、新入生の入学状況や卒業生の就職問題等を協議した。当会からは、武田会長、佐藤事務局長、村田事業部長が出席した。

なお、当日は特に理工学部長木下茂徳先生が懇談会にご出席されて、本連絡会の存在意義を強調され、激励をうけた。

第6回「母校を訪ねる会」

日時 昭和61年10月26日㈰(予定)

対象 第14回卒業生(41年3月卒業)

該当しない校友の参加も歓迎いたします。

なお、前回同級会の開催等を計画されて、多数出席されるようお待ちいたします。

北海道支部

支部長 長谷川清廣(土14回)九松館建設株

事務局長 松久房夫(土19回)札幌市下水道局

東京支部

支部長 古村和夫(土3回)古村建設株

東海支部

支部長 平野卓(土3回)東京エンジニアリング株

名古屋支社

事務局長 河野叶(土6回)福德建設株

九州支部

支部長 矢俣敏之(建8回)株大林組 福岡支店

事務局長 陶山順一(建15回)株陶山建設

四国支部

支部長 谷久嘉典(土8回)布谷久工務店

校友会報 第47号

発行部数 30,000部

発行所 日本大学工学部校友会

福島県郡山市田村町徳定字中河原1

郵便番号 963-11

電話番号 郡山(0249)44-1327

振替口座番号 郡山5-1990

発行日 昭和61年3月1日

発行者代表 会長 武田仁幸

編集者代表 事務局長 佐藤光正